

旧情報導入辞としての ‘that’ と統語的制約¹

－旧情報・非焦点節内からの要素の摘出を巡って－

根 本 貴 行

Syntactic Constraint of ‘that’ as a Marker for Old Information

Takayuki NEMOTO

Abstract

I will discuss the word ‘that’ in this article, which functions as a pronoun, a relative clause marker, and a complementizer. I will also verify several types of complementizers, the behavior of which depends on the environment in which complementizers are used; the complement of bridge verbs, non-bridge verbs, and factive verbs, respectively. I will propose here that ‘that’ function as a marker which introduces old information or non focused elements, and that extraction of wh-words out of such elements degrades the grammaticality of a sentence.

0. はじめに

指示語としての that は、周知の通り、① 動詞の補部節を導入する補文標識、② 同格節を導入する補文標識、③ 関係代名詞としての that、といった様々な用法を持っている。① に関しては、さらに say や think といった架橋動詞の補部節、murmur や mumble といった非架橋動詞の補部節、regret や comprehend など叙実動詞の補部節といった下位カテゴリーに分類され、それぞれの特徴を観察する必要がある。また、補文標識は、補文標識の直前に副詞が位置している場合なども、特徴的な統語的特性を見せることが観察されており、考察の必要がある。本稿では、that は旧情報または非

焦点要素（節）を導入する機能を持っており、同時に、旧情報もしくは非焦点を表す節内から wh 疑問詞要素を摘出すると、文の文法性を低下させる統語特徴があることを見ていく。

考察の流れとして、はじめに、① から③の用法に関して、that が旧情報もしくは非焦点要素（節）を導いているということを考察する。次に、① から③の用法における統語特徴を観察した上で、補文内からの要素の摘出の可能性が、情報構造における情報の新旧、焦点・非焦点に関係することを述べる。そして、旧情報や非焦点を示す節内から wh 疑問詞要素を摘出すると文の文法性が低下するという傾向を見ていく。こうした考察の帰結として、統語論の

1 本論文の執筆に関しては、千葉大学名誉教授村田年先生との個人的な議論を通して発想や着想を得た部分が多い。ここに記して感謝申し上げたい。

枠組みでは原理的な説明が困難である、いわゆる that-trace 効果について説明を試みたい。

1. 先行研究と情報構造、焦点・非焦点について

久野 (1978) や高見 (2001) によれば、旧情報とはコミュニケーションをする話者間において既に述べられたことであるか、周知の事実であったり、話題になっている事柄のことである。文において、特にストレスが置かれ強調されたり、even や still、only など形態的に強調されるような要素がない限り、旧情報から始まり文末に向かって新情報へと流れていく。

- 1a. Mary bought John a nice warm jacket.
- 1b. Mary bought him a nice warm jacket.
- 1c. *Mary bought a nice warm jacket for him.

特に文中のどこかにストレスが置かれて発話されない限り、(1a) では a nice warm jacket が文末の要素であり新情報となる。一方、(1b) では間接目的語に代名詞が用いられている。代名詞は既に談話の中において現れた要素を言い換えたものであり、話者同士間において既知であり周知の事柄、すなわち旧情報ということになる。(1b) の文が強勢などに関してデフォルトの形で発話された際、旧情報の him が文中に現れているため、a nice warm jacket が新情報となり問題ないが、(1c) では文末要素に旧情報の him がきており、文における情報の流れと一致せず、この文の文法性は低下する。

さらに、高見 (2001) は、文要素の削除や縮約に関する制約として、こうした要素は文において焦点にあってはならないことを述べている。

- 2a. *John discussed two topics that Mary did.
- b. [?]John discussed only two topics Mary did. (高見 2001)

(2) の例は、それぞれの文末において Mary discussed two topics が削除されている、いわゆる先行詞内削除の例である。(2a) では、文末で新情報を担う要素が削除されており、削除や縮約に関する制約に反し、非文法的な文となる。一方、(2b) では、文中の only が焦点となるため、文末の要素が削除可能となる。Quirk et al. (1985) でも述べられている通り、only は焦点を示す副詞として働いており、こうした語彙が文中に現れると、それ以外の要素は非焦点化され则认为られる。

文におけるこうした情報構造や焦点・非焦点にまつわる制約を用いて、以下では that の諸用法が旧情報や非焦点を示すマーカーとして機能しているのではないかとすることを考察していきたい。

2. that の諸用法と情報構造

本章では、that の諸用法が旧情報の導入辞もしくは非焦点要素を導くマーカーとして機能しているということを見ていく。

2.1. 指示語

そもそも代名詞として用いられる that は、既に談話の中に出てきた事柄を指示するので旧情報である。

- 3. A: I weighed myself this morning — 78 kilos.
B: Oh, — I didn't think you were that heavy!

A: Me neither!

(大西・マクベイ 2006)²

B: Oh, sorry. I didn't realize.

(大西・マクベイ、2006)

(3) が示す通り、that は談話の既出事項を指示しているため、旧情報である。

また、談話において指を差しながら用いられる指示語としての that についても、旧情報のマーカーであると言える。例えば、“Look at that strange man. What is he doing there?”のような談話において、that strange man が初出要素であったとしても、次のようなことが考えられる。すなわち、この発話が生じると同時に、発話者は strange man を指差し、聞き手はその指示に視線を向けることが想像される。that という指示語は指差しや視線をフォローする語彙ということになり、旧情報と言えないまでも新情報ではなく、ジェスチャーや状況を補足する語彙と考えることができる³。

2.2. 補文標識の that

補文標識は、生じる環境に応じて削除が可能な場合、不可能な場合がある。本節では、一般的な動詞（以下架橋動詞）、架橋動詞に比べて意味内容を多く含んでいる非架橋動詞、及び叙実動詞に関して、それぞれ動詞の補部節に生じる補文標識と、主語節を導く場合の補文標識について、それぞれが旧情報もしくは非焦点要素（節）を導いているという可能性を考察していきたい。

はじめに次の例を見てみよう。

4. A: Excuse me, sir. I am sorry to say
that no one is allowed to enter
without a jacket and tie.

5. A: Don't be upset. Can't you see? he's
only joking?

B: No, I think ϕ he really hates me.
(ibid)

例の (4)、(5) とともに補文標識は架橋動詞 say や think の補部名詞節を導いている。大西・マクベイ (2006) も述べている通り、補文標識の that は伝える節の内容を間接的で丁寧に導入する役割を果たしている。(4) の例では、動詞の補文がホテルのドアマンやドアボーイがお客に対して丁寧に断る状況を表しており、この文で補文標識の削除が行われると、丁寧さが欠如してしまいふさわしくない。一方、(5) の文では、B の発話内において、補文は発話者の感情を聞き手にぶつける内容となっており、この例では、むしろ内容を丁寧に導く that の存在は不自然である。

Bolinger (1972) は、say や think などの架橋動詞の補部節に生じる補文標識について、新情報をあたかも旧情報のように導入する要素であると述べている。次の例を見てみよう。

- 6a. Time is short.
b. Time is so short. / The time is short.
c. ?I'm sorry time is short.
d. I'm sorry the time is short. / I'm
sorry time is so short.
e. I'm sorry that time is short.

(Bolinger 1972)

² 大西・マクベイ (2006) においても、that の諸用法が共通する概念に基づいているという記述がなされている。

³ もしこの考察が正しいければ、実際に発話者と聞き手の間でジェスチャーが用いられる口頭での発話と、ジェスチャーなどの先行する情報が得られない文字による表現では、情報構造が異なるということが考えられる。

(6b) のように so や the time があれば、話者の判断や意見が反映されており、(6d) のように主文に埋め込んでも自然である。一方、(6a) のように話者の態度や判断、意見のない文は、主文に埋め込むと不自然な文となる。しかし、Bolinger (1972) によれば、補文標識は (6e) のように、話者の判断や態度表明のない初出内容である新情報をあたかも (6b) のような文を埋め込む時と同じく、節の内容を旧情報であるかのように導入する働きがあると述べている。

さらに、安藤 (2005) は、補文標識の that と whether の差異について、that が用いられるときは、補文の内容が前提となっており、whether が用いられるときはその内容を疑わしいと思っているときであると論じている。

- 7a. John is certain / is sure / knows that
/ *whether it will rain.
- b. Do you know whether the plane has
landed?
- c. Do you know that the plane has
landed? (安藤 2005)

主動詞 (述語) が話し手の確信を表している (7a) では、whether の使用は許されない。また、疑問文においても、安藤 (2005) によれば、(7c) は事実に対する不信を示していると述べられている。

次に、非架橋動詞のケースを見てみよう。

- 8. John murmured that Mary failed to
bring the document.

murmur の意味は、架橋動詞である say の意味に発話の仕方に関する情報を付加した意味である。この点において、非架橋動詞の場合は、架橋動詞の場合に比べて補文の焦点化がされに

くいということが言えるのではないかと考えられる。後の章でも触れるが、非架橋動詞の場合、動詞に焦点が置かれるため補文が非焦点要素となり、非焦点要素を導く補文標識は削除形が許されない。

さらに叙実動詞のケースも同様のことが言える。叙実動詞とは、補文節の内容が前提として解釈されるような動詞である。

- 9a. John thinks that the door was closed.
- b. John doesn't think that the door was
closed.
- c. John regrets that the door was
closed.
- d. John doesn't regret that the door was
closed.
- e. Did John regret that the door was
closed?

(Kiparsky and Kiparsky 1970)

架橋動詞の think の場合、主節が否定文になると補部節の内容は2通りの解釈が可能となる。すなわち、(9b) は「ジョンは、ドアが閉まっていたと思わなかった」という解釈と「ジョンは、ドアが閉まっていなかったと思った」という2通りに解釈される。後者の解釈では、補部節の内容は出来事が事実ではないということを含意していることになる。

一方、叙実動詞 regret の補部節では、主節が否定を表しても補部節の内容は前提のままである。すなわち、(9d) では「ジョンは、ドアが閉まっていたことを後悔していない」という解釈のみで、「ジョンは、ドアが閉まっていなかったことを後悔した」という補部節の内容を否定の意味で解釈することはできない。叙実動詞の補部節が前提として解釈されるということにより、叙実動詞の補部節を旧情報として解釈

すると考え、論を進めていきたい。

同格節では、補文標識の直前の名詞が、補部節の存在を期待させるため、新情報を付加する役割があると考えられる。

10. Everyone shares the belief that the document is very important.

(10) において the belief は新情報であり、以下の同格節は the belief の内容を付加する役割を果たしている。the belief まで発話された段階で、以下にその内容が期待されるということが考えられる。Quirk et. al. (1985) においても、同格節ではその情報内容が前提とされていると述べられており、この状況は序実動詞の補部節のケースに似ている。

さらに、高見 (2001) によれば、同格節の主要部である名詞には不定冠詞がつかない⁴。

11. *a / the fact that Mary got married to John

高見 (2001) によれば、この場合の不定冠詞は後方照応的な冠詞であり、後続する事実内容によって特定化されるものであると考えられる。

最後に、主語節を導く補文標識も、旧情報を導くものであると考えることができる。

12. That you study French during the summer vacation is a good idea.

既に述べたとおり、文における情報の流れは文尾に行くほど新しい情報へと移行するため、文頭に生じる主語は旧情報を表しているという

ことが言える。(12) のように文頭に主語節が生じる場合、そもそも主語は旧情報であるため、旧情報である主語節を導く補文標識の削除が認められないことが説明される。

2.3. 関係詞 that

Hooper and Thompson (1973) や高見 (2001) によれば、主要部名詞句である先行詞は新情報として解釈され、関係節内は了解済みの内容、すなわち旧情報として解釈される。また、特に先行詞の定性が高まり、関係詞 that が用いられるような環境では、関係節内での削除、いわゆる先行詞内削除が可能である。

- 13a. ^{2/??} Bill hit the man that John did.
b. John discussed every topic that Mary did. (高見 2001)

(13a) では、先行詞の定性がそれほど高くなく関係詞を which と交換可能である環境であるが、文自体が不自然であると判断されている。一方 (13b) は、先行詞の定性が高く、関係詞 which との交換はできない。先行詞の定性が高まるということは、先行詞に焦点が置かれ、関係詞 that のみが許される環境では、関係詞 that 以下の要素が非焦点要素になると考えられる。

2.4. 副詞と補部節

高見 (1995) の次の例を見てみよう。

- 14a. John drove a car with a sunroof in Boston.
b. John drove a car in Boston with a

4 Quirk et. al. (1985) によれば、同格節主要部に不定冠詞がついたり、複数形になったりする例も観察されている。

i. A message that he would be late arrived by special delivery.

ii. Stories that the house was haunted angered the owner.

sunroof.

- c. In Boston John drove a car with a sunroof.
- d. *John drove a car carefully with a sunroof.
- e. *Carefully John drove a car with a sunroof. (高見1995)

高見(1995)によると、(14a)がデフォルトの語順であるとすれば、(14b)はwith a sunroofが文尾へ移動しており、その結果新情報として解釈される。(14c)が示す通り、in Bostonは文頭にも表れる要素であり、(14b)では、in Bostonが主題の位置にあり旧情報として解釈される。一方、carefullyは(14e)が示す通り、文頭には現れず、そもそも文中に現れて新情報を示すものである。(14d)では、with a sunroofが文尾に移動して新情報を表すにもかかわらず、その直前に新情報であるcarefullyがあるため、情報の流れ上不自然な文として解釈される。

この例を踏まえたうえで、次の例を見てみたい。

15. John said sadly that Mary presented a tie to her boy friend.

高見(1995)の例で見たとおり、(15)の例では副詞sadlyが文の焦点として働くため、後続する補部節は非焦点位置として解釈されると考えられる⁵。

3. 補文標識と補部節の統語的特性

これまで、指示語をはじめとして補文標識や関係詞として用いられるthatは、旧情報もしくは非焦点要素(節)の導入機能を果たしているという観察を行ってきた。本節では、こうしたthatの統語上の振舞いを観察し、情報構造上の機能と統語上の制約に一致した振舞いがあることを見ていきたい。

一般に、補文標識のthatは任意に削除可能であると言われている。しかし、これまで見てきたthatが旧情報もしくは非焦点要素を導く機能を果たす場合、補文標識の削除は許されず、義務的に生じなければならない。また、これらの補部節からはwh要素の摘出が許されず、つまり島を形成しているということが観察されている。(16)が示す通り、一般に定性が高まるほどwh要素の摘出が困難になることが観察されている。

- 16a. Who did you see [a picture of t]?
- b. ?Who did you see [the picture of t]?
- c. *Who did you see [his picture of t]?
- d. *Who did you see [those pictures of t]?

定性が高くなるほどこうした要素からのwhの摘出が困難になるということは、旧情報からの摘出が困難であるということになる。

初めに、非架橋動詞と叙実動詞のケースを見てみよう。

- 17a. John murmured *(that) Mary failed to bring the document.

5 補文内で話題化が生じている例も分析対象として挙げられなければならない。

i. John said that with a great difficulty, Mary completed the project.

情報構造上、補部節が旧情報として考えることが困難である。しかし、この補文標識の義務制や補文からの要素の摘出可能性について、他の補文標識と同じ振舞いをするため、この補部節を旧情報として解釈すると考えることができれば、一貫した説明が可能となる。この点は今後の課題として分析を進めたい。

- b. *What did he mumble that John did
t? (Erteschik 1973)
- c. John regrets *(that) the door was
closed.
- d. *How do you regret that you
behaved t? (Cinque 1990)

Nakajima (1996), 根本 (1996) などによれば、(17a, c) が示すように、主節動詞が非架橋動詞や叙実動詞の場合、補文標識の削除は認められない。また、(17b, d) の通り補部節からの wh 移動も認められない⁶。

本論で仮定している通り、旧情報もしくは非焦点節からの wh 移動が禁止されるとするならば、以下の例で示すように、コンテキストとして非架橋動詞や叙実動詞の補部節が先行文と対比され、焦点を示すような場合は、これらの節内からの wh 移動が可能である予測となる。

- 18a. John murmured that Mary would
come to the party, and what did he
(also) murmur that Nancy would do?
- b. John regretted that Mary didn't
come to the party, and what did he
(also) regret that Nancy did?

(18) では、主節動詞が先行文と後続文が同一であり、後続文における非架橋動詞、叙実動詞はそれぞれ旧情報であるとみなすことができる。そのため、それぞれの例における補文は、通常の情報構造の流れに従い新情報もしくは焦点位置とみなすことができる。生成文法の枠組みにおいて、Melvold (1991) や Nakajima (1996)、根本 (1996) では、文の根 (root) の

構造で、CP が繰り返される構造を仮定している。例えば叙実動詞の場合では上位 CP に事実を導くオペレータを仮定している。

19. John regretted that Mary didn't
come to the party, and what_i did he
(also) regret [_{CP} OP [_{CP} that [_{TP} Nancy
did t_i]]]

従属節から wh 要素が循環的に移動する際は、叙実動詞の補部節 CP にこのオペレータがあるため、移動が阻止されると仮定されている。しかし、(18) のように叙実動詞や非架橋動詞からの要素の抽出に関して、情報の新旧によって文法性が変わるとすれば、CP 指定部にオペレータを仮定する説明では (18) の文法性に関して、予測が十分可能ではないことになってしまう。

同様に同格節に関しても、(20) が示すように、補文標識は義務的に生じなければならない、また同格節内からの要素の抽出は禁止されるということが観察されている。旧情報もしくは非焦点要素からの要素の抽出でもあり、非文である予測と軌を一にしている。

- 20a. Everyone shares the belief *(that) the
document is very important.
- b. *What did he hear the news that all
the students read?

生成文法の枠組みでは、同格節からの要素の抽出は、いわゆる複合名詞句からの移動となり、最小連結条件 (Minimal Link Condition) に違反するため非文となる。機能的に考えてみると、

6 叙実動詞の補部節からの wh 移動に関しては、15d が示す通り、付加部要素の移動は禁止されるが、項の移動は許され、いわゆる弱い島を形成する。(Cinque 1995)

i. To whom do you regret that you could not speak?

項と付加部の差を情報構造上示す作業が必要であり、本稿においては、今後の課題として残ることとなる。

(20a) における同格節は belief の存在を前提としてその内容を述べているため、非焦点要素である。(20b) ではその非焦点要素から what が移動しており非文法的であることが説明される。

複合名詞句からの移動に関しては、関係節内からの移動についても最小連結条件によって阻止される。しかし、高見 (2001) では、この条件に違反するにも関わらず文法的な文が挙げられている。

- 21a. This is the child who there is nobody who is willing to adopt.
b. *This is the child who John married a girl who dislikes. (高見 2001)

高見 (2001) によれば、複合名詞句からの要素の抽出が可能となる (21a) は、関係節全体が先行詞である子どもについての説明になっているためであると述べている。(21a) では関係節が子どもについての叙述である一方で、(21b) では、関係節の前半では John についての叙述となっており、この点において (21b) の文法性が低下している。(21) では関係詞 who が用いられているが、先行詞の定性が高く that を用いなければならない環境において、その文法性はどうか。

22. *This is the most miserable child that there is nobody who is willing to adopt.

(22) は、文法的であると判断されている (21a) の文における先行詞の定性を高めた文である。ネイティブによると、(22) の文法性は極めて低いという判断であり、旧情報もしくは非焦点領域からの抽出に関して予測に沿った結果となっている。

主語が節となっているケースを見てみよう。既に例を挙げているとおり、情報の流れの原則に基づけば、そもそも主語は旧情報である。また、主語からの要素の抽出は、主語が節でなくとも禁止され、島を形成することが一般的に生成文法の枠組みで観察されている。

- 23a. *Who would [a picture of t] surprise?
(Chomsky 1986)
b. *What is [that you study t] is a good idea ?

(23b) が示すとおり、主語節からの要素の抽出は、旧情報からの要素の抽出でもあり、非文法的な文である⁷。

最後に、補分標識の直前に副詞があり、補文標識が義務的に生じているケースを見てみよう。

- 24a. John said sadly that Mary presented a tie to her boy friend.
b. What did John say sadly that Mary presented t to her boy friend?

既に見たとおり、これらの例では補文標識の削除が認められない。(24b) では sadly に焦点

7 主語が焦点となるような場合、主語節からの抽出が可能であるある予測が成り立つ。

i. That you even study French is a good idea.
ii. *What is that you even study t a good idea?
ii. ?Still that you study French is a good idea.
iii. *What is still that you study t a good idea?

しかし、主語が節であり、かつ焦点を担うという状況は考えにくい。上記 i の例では、even 以下が焦点要素となるが、主語そのものは主題であり旧情報であると考えられる。

が置かれるため補部節は非焦点としてはたらく。一方、非焦点領域から要素を抽出すると文の文法性が低下することが予測されるが、(24b) はネイティブの判断によるとそれほど文法性が低いわけではなく、本稿の予測からすると問題となる。

旧情報を導く補文標識 *that* が削除されず可視的に存在する際、その補文内からの要素が抽出できないという予測は、架橋動詞の補文からの要素の抽出が一切できないことを予測する。しかし、ネイティブからは、補文内から *wh* の抽出が生じている以下の例では、補文標識が削除されている文の方が好ましいとの回答が得られた。

- 25a. What did John think that Mary read?
b. What did John think Mary read?

補文標識の直前に副詞がある (24a) の例では、そもそも補文標識を削除することが許されないため、補文から *wh* が抽出されている (24b) では何らかの要因で補文標識が義務的に生じることになっていると思われる。ただし、依然として、旧情報・非焦点をマークする補文標識と、本稿における旧情報および非焦点領域内からの要素の抽出可能性という点からすると、矛盾する結果となるため、今後の考察の課題となる。

4. 帰結

旧情報もしくは非焦点領域からの要素の抽出が回避されるという予測に基づくと、生成文法において一般原理では説明がなされていない *that-trace* 効果について、その文法性が予測可能になると考えられる。

- 26a. *Who did John think that *t* met Mary?
b. Who did John think *t* met Mary?

例えば *that-trace* 効果に関しては、Chomsky (1986) の空範疇原理により説明が行われている。移動後に残された痕跡は統率されなければならない主語が移動し繰り上がった場合、主語の位置は語彙統率されないので、先行詞によって統率されなければならない。(26a) のように補文標識が可視的に存在する場合は、補文標識が障壁となり、主語位置の痕跡が先行詞統率されない。しかし、補文標識の範疇としての *C* は障壁にならず、可視的に語彙化された補文標識が障壁となるアドホックな説明になってしまい、原理的な説明が困難である。また、Chomsky (2000) 以降の極小主義の枠組みにおける誘引 (Attract) のシステム下では、補文の主語位置も文全体の根 (Root) から見ると誘引可能な位置でもあり、補文標識の有無に関係なく主語誘引が可能である予測となってしまう⁸。

27. [_{CP} Who [_C did + Q [_{TP} John think [_{CP} t [_C (*that) [_{TP} t [met Mary]]]]]]]

(27) において、*who* は文頭にある *wh* オペレータの *Q* によって誘引される。Chomsky (2000) によれば、直近の誘引可能な要素が誘引されるため、補文標識の有無に関係なく、補文主語位置の *who* が誘引されることとなる。

一方、本稿の予測によれば、補文標識は旧情報もしくは非焦点要素を導入する要素である。架橋動詞における補文標識は、状況に応じてその節の内容をあたかも旧情報として導入したい場合には可視的に生じ、そうでない場合は削除さ

8 素性誘引システムにおける *that-trace* 効果の説明に関しては Nemoto (1999) を参照。

れると考えられる。補文の主語が疑問詞として文頭へ移動している (26) において、(26a) のように補文標識が可視的に生じていると、補文自体が旧情報として解釈され、ここからの要素の摘出が阻止されることとなる。そのため (26a) は非文法的と予測することができる。(26b) では、補文標識が削除されているため、補文が旧情報として解釈されず、したがって主語位置からの who の摘出が可能であると予測される。

5. 結語

本稿では、that の用法に関して、指示語、補文標識、関係詞として機能しながら、旧情報もしくは非焦点要素を導入する機能を有しているのではないかという点について考察を試みた。同時に、こうした旧情報もしくは非焦点領域からの wh 要素の摘出が文の文法性を低下させるという統語制約と一致している可能性を検証してきた。これは、機能的な側面と統語的な側面において、何らかの普遍的な制約関係があるのではないかということを示唆するものであり、文法モデルを考える上で興味深い一面を呈していると思われる。

that が補文標識として用いられた際、架橋動詞の補文内からの要素の摘出可能性や、補文内で話題化が生じた場合の補文内からの要素の摘出可能性など、いくつかの点でさらなる考察が期待される以外は、概ね、軌を一にした機能が観察された。また、生成文法で文法性の予測が困難に思われている that-trace 効果について、その文法性の予測が可能であるということを見た。生成文法において一見すると原理的な説明が困難な現象において、文体的な理由に還元する可能性もあるが、情報構造という機能的な側面を考慮することで説明が可能であるという点も、文法モデル構築に際して考慮していくべき側面であると思われる。

参考文献

- Bolinger, Dwight (1972) *That's That*, Mouton.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*. MIT Press.
- Chomsky, Noam (2000) 'Minimalist Inquiries: The Frameworks.' *Step by Step: Essay on Minimalist Syntax in Honor of Howard*
- Lasnik, Roger Martin, David Michael and Juan Uriagereka, (ed.) MIT Press.
- Cinque, Guglielmo (1990) *Types of A'-Dependencies*. MIT Press.
- Erteschik-Shir, Nomi (1973) *On the Nature of Island Constraints*. PhD dissertation, MIT.
- Kiparsky, Paul and Carol Kiparsky (1970) 'Fact.' *Progress in Linguistics* M. Bierwisch and K. Heidolph (ed.) Mouton.
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』 大修館
- Melvolt, Janis (1991) 'Factivity and Definiteness,' *MIT Working Papers in Linguistics* 15. MIT.
- Nakajima, Heizo (1996) 'Complementizer Selection,' *The Linguistic Review* 13
- 根本貴行 (1996) 「話題化構文と節構造：経済性の原理による項 / 付加詞の非対称性について」『英文学思潮』第69号 青山学院大学英文学会
- Nemoto, Takayuki (1999) 'Feature Movement of Reflexives in English' 『紀要』第40号 青山学院大学文学部
- 大西泰斗、ポール・マクベイ (2006) 『ハートで感じる英文法』NHK 出版
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of*

the English Language. Longman.

高見健一（1995）『機能的構文論による日英
語比較』くろしお出版

高見健一（2001）『日英語の機能的構文分析』
鳳書房